

『チツソは私であつた』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

―「個の責任」の自覚から見えてきた水俣病事件の本質―

平 田 厚 志

はじめに

まず初めに、宗教哲学的思索の営みとも読み取れる次の文章を掲げることにした。

人間の危うさと愚かさ、されどどうしようもなさ。

いま、その巨大な壁にぶつかっている。

まやかしの虚構、偽りのシステムの中で延命的に続く幻想が崩れた時、絶望が生まれる。

その絶望感からしか何も生まれない。

どうしようもないけれど、絶望の淵で普遍性を探している。

大転換が起きるところは、方法論ではない。

立場、加害者・被害者、年齢、国籍、性別でもなく。

一人という地点では、決定的な違いではない。

私が一人という私に立ち返ることが、立場を超えることに繋がる。

(緒方正人、水俣病センター相思社編『三人委員会 水俣哲学塾』に向けてのメッセージ)

上掲の文章の前半(絶望)と後半(普遍)を、たとえば「非連続の連続」(西田幾多郎や三木清の思想)の関係として捉えるならば、この文面は宗教哲学的思索の深化を予測せしめるほどの意味深いものがあり、近代日本を代表する哲学者・西田幾多郎(一八七〇〜一九四五)晩年の宗教哲学の極地にも通ずるものを感じる。とりわけ、末尾の「私が一人という私に立ち返ることが、立場を超えることに繋がる」という一節は、絶対・普遍なるもの(自然界の全生命体を支配している法則性)に逆対応的・逆限定的に接する唯一個の「一人」としての「自覚」の表明であるとすれば、それは同時に「人間の極限」「人間の代表者」としての宗教的立場における主体的自己の「自覚」とも受け取れるから、絶対普遍的なるものの呼び声に応答し、能動的な真の自己が呼び覚まされて、本来的な在り方(西田のいう「平常底」^① || 日常生活の底を突き抜けたような境地)に立って自己に立ち返ろうとする志向性が見受けられる^②。同時にこの一節から、相通ずるものとして「親鸞一人がためなり」という、あの『歎異抄』後序の親鸞の言葉^③をも彷彿させるものがある。

上掲の引用文は、緒方正人氏(一九五三^④)の言葉である。緒方氏(以下、「氏」の敬称略)^⑤は、『チッソは私であった』(初版、二〇〇一年、葦書房・文庫版、二〇二〇年、河出文庫)の著者として、水俣病事件^⑥に関心を

『チッソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

持つ人々の間では著名な人物である。本業は、不知火海しらぬいかい（八代海やつしろかいの別称）で刺し網漁の漁師を生業なまわいとして生計を立てている一生活者であると、彼自ら名告っている。しかし、彼のプロフィールについては（一）に掲げるように、水俣病患者としての彼のこれまでの足跡は壮絶なものであった。幼少期より塗炭の苦痛を背負いつつ、未認定患者の認定申請運動に長年身を投じながらも、「システム」内部の運動を否定して、単身、患者認定申請をとりざげ、あらゆる生命界の自覚の上に、「システム」を超えた個イコール衆の世界を築き上げ……まさに現代的な復活をとげようとしている⁽⁵⁾。孤高の思想家でもあるのだ。「水俣病事件の本質とは何か」という難問が、高度産業文明下に生きる現代の人間に突きつけられたとき、彼は被害者であるにもかかわらず、現場での壮絶な身体体験をもとに、それを自分自身に課せられた抜き差しならぬ課題として実存的に突き詰め、いまなお、すべての「命いのち」の蘇りを模索し続けている稀有な哲学者と評したとしても、決して言い過ぎではないと思う。

緒方は、『苦海浄土』の著者、故石牟礼道子（一九二七～二〇一八）らとともに、「本願の会」を発足させ、その中心的存在としてすべての犠牲となった生物体への鎮魂・再生・蘇りのための活動を、いろいろな表現形態によって展開してきた。彼の水俣病事件に対する「構え」の底流をなす思想水脈には、水俣病で傷つき、亡くなっていたすべての生き物に対する自身の罪、人間の罪を「個としての人間の責任」として自覚し、その自覚を通して見えてきた宗教的世界には、大乘仏教の思想にも通底する宗教的エートスの風景が広がっているのではないかと推測される。もともと、そのようなレッテルを貼られることに、緒方は迷惑極まりないと言われるに違いないと思うが、本稿はこうした視点から緒方正人の宗教的内面世界を垣間見、かつその普遍的思想の「現代的な復活」の可能性を探ってみたいと思う。

こうした試みは、私自身の立ち位置の問題でいえば、いまなお巨大な伝統仏教教団としてシステム化された体制の中に安住する浄土真宗本願寺派教団が、近代最大の公害事件といわれる「水俣病事件」に、ほとんど救済の手を差し伸べてこなかったことへの贖罪の気持ちをも、宗派に所属する一僧侶である私自身に厳しく問うことでもある。

(一) 緒方正人のプロフィール

一九五三(昭二十八) 熊本県葦北郡芦北町女島沖村池の尻東こちどまり 泊とどまりの網元緒方家もとえ本家に二十人兄妹の末っ子

(戸籍上は十八番目)として、十一月八日に生まれる。

一九五九(昭三十四) 父の福松、急性劇症型の水俣病で「狂い死」にする(十一月二十七日、没)。自身も発病。この後、何人かの兄弟姉妹を水俣病で失う。

一九七四(昭四十九) 水俣病患者としての認定を申請し、水俣病認定申請者協議会に加入。以後、行政との直接交渉などに精力的に参加。

一九七五(昭五十) 水俣病認定申請者協議会の副会長(事務局長兼任)に就任。自主交渉支援者が移住していた「唐船荘」とうせんそうに入入りし、運動に没頭。「急性劇症型水俣病で命を奪われた親の仇を取る」が当時の正人の口癖。

熊本県議会議員の「認定申請者にはニセ患者が多い」との発言への抗議中に暴力を振るったとして、他の三人とともに逮捕、起訴される(いわゆる「水俣病謀圧事件」有罪

『チツソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

確定)。熊本地裁での公判で、支援者の一人の石牟礼道子とはじめて出会う。

一九七八（昭五十三） 熊本県の患者認定業務の遅延に対して国家賠償を求める「待たせ賃訴訟」を提訴し原告団長となる。後に申請患者一五〇〇人が訴訟参加（一審・二審勝訴の後、上告審・差し戻し審・再告審敗訴、確定）。

一九八一（昭五十六） 水俣病認定申請患者協議会の会長に就任。

一九八五（昭六十） 川本輝夫たちと一緒にやっていた運動（水俣病認定申請患者協議会）から抜けることを決意し、（四年目の任期切れの際に）申請協会長を辞す。それと同時に自身の認定申請を取り下げることにも決意。その後約三か月間、「狂う」。そして、十二月二十七日、申請を取り下げる。

一九八六（昭六十一） 「水俣病問いかけの書」をチツソ社長・野木貞雄宛に発す。

一九八七（昭六十二） 「常世の舟」が完成、舟下しの祝い。浜本二徳・杉本栄子・石牟礼弘・道子夫婦、祝いに駆けつける。十二月七日、「常世の舟」を漕いで丸島漁港に入港。リヤカーに七輪やムシロをのせて、屋台のオツチャンといういで立ちでチツソ正門前横に、座り込みを開始。十二月から翌年五月末までの半年間、単身で週一回のチツソ正面前横に座り込み、ムシロに呼びかけ文を書く。

一九九〇（平二） 「みなまた一万人コンサート」が水俣湾埋立地で実施されることに抗議して、熊本県知事細川護熙・水俣市長岡田稔久宛て「水俣病意志の書」を発す。

一九九四（平六）

患者有志（主メンバーとしては、田上義春、浜本二徳、緒方正人、杉本栄子・雄、石牟礼道子・弘、西弘ら）十七名の連名で「本願の書」を発表。

一九九五（平七）

緒方正人『本願の会』発足にあたって」と題する挨拶文をしたためる。

水俣市中央公民館二階に約四十人ほどが集まって、「本願の会」の発会式。それまで「地藏さんの会」「野仏の会」などと様々に呼んできた会の名称が、正式に「本願の会」と決定。本会は「会則」や役員は作られたが、組織というより個人の集まり。

沖繩へ旅行。写真家で民俗学者の故比嘉康雄の案内で、宮古島の森に囲まれた聖地御嶽^{うたき}を巡ぐる。かれはそこで受難の地としての水俣湾の埋立地が、現代の御嶽として蘇るといふビジョンを得た。

「『人間の責任』の行く方を見極めたい」とアウシュヴィッツ（ポーランド）へ旅行、約一ヶ月滞在。

一九九六（平八）

芦北の自宅から水俣の埋立地まで、およそ二十kmの山道を徒歩で踏破。四月まで、毎月朔日にこれを実行。

「水俣・東京展」開催に際し、不知火海に残る内海漁業用の木造帆船打瀬船・「日月丸」^{にちげつまる}（石牟礼道子に依頼して命名）に「魂を乗せて」、総勢五名の乗組員で水俣湾を出航。十三日間、一五〇〇kmの過酷な航海を経て、ようやく東京湾に到着。

緒方正人語り・辻信一構成『常世の舟を漕ぎて―水俣病私史―』世識書房刊。

『チッソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

一九九七（平九）

一体目の石像を建立して、水俣湾埋め立て地に安置。

二〇〇〇（平十二）

石牟礼道子ら「本願の会」会員とともに、水俣湾埋め立て地で「祈りのタペーもとの命につながるい」を催行。

二〇〇一（平十三）

『チッソは私であった』（構成Ⅱ渡辺京二）を葦書房から刊行。

二〇〇二（平十四）

水俣湾埋め立て地で「魚満天（イオマンテン）の夜」という儀式を行う。
東本願寺「高倉会館親鸞聖人讃仰講演会」で、「生命の記憶よ甦れ」と題して講演。

（本講演の内容は『ともしび』二〇〇三年五月一日発行誌上に収録）。

二〇〇四（平十六）

水俣湾の埋め立て地で、水俣病で亡くなったすべての命への鎮魂と再生の祈りをテーマにした石牟礼道子作の新作能「不知火」の奉納公演を企画し、成功に導く。

二〇〇五（平十七）

産廃処分場を水俣市に建設する計画の阻止活動を開始（二〇〇八年、計画中止）。

二〇一二（平二十四）

自宅にて、早稲田環境塾代表・原剛のインタビュウを受ける。↓「インタビュウ」
「文明の革命」を待ち望む「本願」とは何か」『京都環境学—宗教性都エコロジー—』
（叢書『文化としての「環境日本学」』に所収）。

二〇一五（平二十七）

四泊五日の日程で、一人で沖繩普天間、辺野古を見て回る。

二〇一六（平二十八）

水俣病公式確認六十年記念の特別講演会（東京大学安田講堂）で講演。

二〇一八（平三十）

石牟礼道子死亡（二月十日）。追悼の催し（水俣市もやい館、東京・有楽町マリオン

朝日ホール）で患者・漁民として講話。

「本願の会」の機関紙『魂うつれ』終刊。

二〇二〇（令二）

故・川本輝夫をしのぶ二十一年目の「咆哮忌」（ほうこう忌）（死去は一九九九年二月十八日、実施日は二〇二〇年二月十六日、熊本県水俣市内）に招かれ、かつての同志の一人として出席（「本願の会」副代表）。

現在
『チツソは私であった』（葦書房、二〇〇一）を文庫本として河出書房新社から刊行。
刺し網漁の漁師として、真鯛や太刀魚・鰻などを捕って生活⁷⁾。

（二）「狂い」の体験と価値観の大転換

緒方が青年期に、加害企業のチツソに対して心の底からの謝罪と賠償を要求して、激しい水俣闘争を挑んだ原点は、最愛の父親が急性劇症型の水俣病で“狂い死”させられたことに対して、「オヤジの仇討」（おやぢのあだうち）を何としてでも果たしたいという強い恨みであった。それに加え彼自身も発病、「胎児性水俣病」を背負って生まれてきた甥と姪のこともあり、人一倍チツソに深い憎しみを抱き、復讐することばかりを思い続けてきた。緒方は二十歳から三十二歳までの十二年間、チツソにその加害責任を問う運動に、命のすべてを懸けて「闘争」にのめり込んでいった。しかし、その過程でいつしか水俣病事件の「本質」を見失ってしまったのである。そうした事態に陥ってしまった最大の原因は、それまで彼自身を支えていた価値観に大きな懷疑と揺らぎが生じたことにあった。被害者⇄患者として、一方的に加害者に加害責任を問うために闘ってきた運動形態が、果たしてどれほどの正当性があるのか。善悪

『チツソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

の二項対立的価値観、彼の言葉でいえば、被害者側が「善」、加害者側を「悪」と決め付けた「物差し」にどれほどの妥当性があったのか、ということへの懐疑であった。

そもそも、自分が闘ってきた相手とは、チツソであれ、県・国であれ、法律や制度といった統治システムで嚴重に防禦された巨大な「システム社会」の組織そのものであって、いっこうに闘争相手となる責任主体の顔が見えないのである。一方、被害者側も、「システム社会」にがんじがらめに絡めとられてしまっており、思えば自分もまた「欲望の価値構造の中で同じことをしていたのではないか」（『チツソは私であった』八頁）ということに気づかされ、自己の愚かさや危うさに、いまさらながらに驚愕し、戦慄し、奈落の底に突き落とされるような衝撃を覚えたのであった。すべてはカネに換算され、カネの価値に置き換えられ、国や企業の土俵でものごとが処理されていく中で、ならば「自分はどうかするの」と、いやがうえにも自分自身、何らかの決断を迫られるところまで追いつめられてしまったのである。もはやこれまで抱いてきた価値観（恨みの感情や加害者責任追及に終始していた運動論）がガタガタと瓦解してしまい、深い絶望感に陥って、彼の精神に狂いが生じはじめ、たちまち深刻な躁鬱状態に堕ち込んでしまった。その時の精神状況を問われたあるインタビュで、彼は次のように打ち明けている。

水俣病の公式確認三十年（一九八六年）を前に、三十二歳の私は狂ってしまった。仕事を手につかない、いわば躁鬱状態のようになった。世の中にトリックが仕組まれていて、病気の認定基準であったり、病状の審査だったり、被害者にはどうしようもない次元で、国や企業の土俵でものごとが決められていく。すべてがカネに換算され、カネの価値に変換されていく。そう考えるようになった自分をどうするか。日和見になって現実

に妥協するか。私も患者と一緒に運動してましたから、それを否定して異論を唱えることはとてつもなく大変なことだったのです。敵前逃亡だ、戦線離脱だと陰口が聞こえました。妥協した方が楽だよ、孤立しないし、と一方で私も考えた。

（緒方へのインタビュー「文明の革命を待ち望む―「本願」とは何か―」『京都環境学』No.三六・一四六頁）

一九八五年、緒方は、未認定水俣病患者のリーダーの一人として「体を張って」チッソに直接交渉を挑んできた同志の川本輝夫（一九三一―一九九九）との決別を決意した。それは緒方にとって、水俣病認定申請患者協議会から抜けることを意味（申請協会長職も辞任）し、自身の認定申請も取り下げられることをも意味した。川本からは許しがたい「裏切り」だとして激しい非難を受けるも、それには沈黙して耐えるしかないことで、それよりも緒方の心の中ではもっと劇的な大きな変化が起ころうとしていたのである。それは「狂い」の三ヶ月間の間に起こった。あいだ

この点については、「（非在のエティカ）の生起する場所―水俣病の記憶誌のために」という優れた論文で、人間として「ただ生きること」の欲びとかなしみを根源的に問う対象として緒方正人にも言及している小野文生の分析⁽⁸⁾が的確な判断を下している。緒方がみずから求めていた患者としての認定申請をなぜ取り下げたのか。その理由として小野が挙げる三つの「転換」、つまり、何から何への「転換」があったのかという点、①「制度」のなかに解消される責任から、顔を持つ個人が担う責任への転換、②一方的な責任の構図にもとづく「加害責任」を問う立場から、共に責任を構想的に引き受ける「課題責任」への転換、③裁判による法的制度的「認定」と経済的「補償」に縮減された水俣病問題から、すべての人々が直接・間接に関与する命の連なりとしての水俣病問題への転換、が

『チッソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

緒方自身に強く意識され、認識されることになった、まさにこの三つの「大転換」が緒方の内面で起こったのである。とりわけ、三つ目の「大転換」が重要であろう。三つ目の「大転換」によって、「一人という私に立ち返る」なかで、「チツンはもう一人の自分ではなかったのか」という、大どんでん返しの逆転心境が緒方の心の中に起こったのである。こうなってくると、もはや緒方の認定申請要求の運動はまったくその意義を失うことになり、彼自身の認定申請取り下げの決断は、必然のものとなった。小野が指摘する③への「転換」によって見えてきたものこそが水俣病問題の本質であるとすれば、緒方にとつての「水俣病問題」は、制度的「認定」「補償」としての問題から精神的・宗教的「いのちの連なり」の問題へ、いかえればこれまでの人為的・世俗的価値観に基軸が置かれてきた「水俣病問題」は、倫理的・宗教的価値観に基軸を置く「水俣病問題」へと関心が深まっていくのは当然のことだ、緒方の大どんでん返しは「水俣病事件」の本質・核心を問う問題へ迫ろうとする質的大転換・大飛躍であったということではなからうか。

私が向かい合って言いたかったのはカネのように姿、形がある価値ではない。私の言葉ではうまくいえないが、自分の中に精神運動を感じる感覚に通じていて、それまで考えてもみななかったものと対話し、交信出来るような感覚になっていました。伝えようによっては一〇〇%宗教化した表現になってしまいかねなかった。他人から見たら気がふれたような、そういう状態からこう、自分で腑におちて一年くらい経って現世、現在の世の中に帰ってきたという感じを経験しました。

（緒方へのインタビュー「文明の革命を待ち望む―「本願」とは何か―」『京都環境学』No 三六・

若いころは世の中をひっくり返すとか、革命をやらんばと思つて闘争主義にかぶれてました。私は好悪の感覚が中途半端じゃなかったのです。だからひっくり返る時は、ひどく、深く、ひっくり返るんですよ。自分が宗教的な感覚とか、それまで体験したことのないことを感じ取った時は、私はひっくり返るんですよ。目に見えない大きな働きというか。そういう世界から腹の底をえぐられるように、奥底を見透かされているように思えてきて。

(同上 一四六〜一四七頁)

「自分が宗教的な感覚とか、それまで体験したことのないことを感じ取った時は、私はひっくり返るんですよ」との言辭から察するに、彼の内面深くで宗教的回心にも似た、価値の「大轉換」が起きていたことが見て取れる。「目に見えない大きな働きというか。そういう世界から腹の底をえぐられるように、奥底を見透かされているように思えてき」という告白が、その証左であろう。浄土真宗的にいえば、一切の人びとを一人のこらず救わずにはおかないと誓われた「弥陀の本願」が、緒方の心の奥底にしかと届き、「弥陀の本願」の救いの目当ては「私(緒方)一人がため」に向けられていることをはっきりと感じ取って、歎びの中にも強い衝撃をもつて受け止めざるを得なかつたことであろう。弥陀における衆生済度の願いは、われら凡愚の生きる場においてしか意味を持たず、如来が願いつづけている世界は、まさしくこの娑婆世界に於いて他にはなく、娑婆世界に於いて罪業を背負

うて生きているわれら一人一人が救いの目当てとして願われている。だが、生身のわれらといえは、「それほど（そくばく）の業をもちける身」¹¹「煩惱具足の凡夫」なるがゆえに、日々の行動すべてにおいて「本願にそむき」「本願にさからひ」つづけて生きるしかないわれらなのである。つまり、われわれ凡夫がなす行為の一切はすべて皆、顛倒しており虚偽でしかない。こうした境涯から抜け出せないでいるわれらであることを、とつくの昔から見抜かれていた如来だからこそ、如来の悲しみと愛はますますわれらに向けられ、注がれているのである。わたしがこの事実に気づかされるためには、深い煩惱に覆われた（一人（ひとり））性から弥陀の本願を忘れていたと気づいた深い（懺悔）が、弥陀の本願を憶い起こして弥陀に帰依するとき、（一人（いちにん））性としての自己が生まれる。すなわち、（一人（ひとり））性から（一人（いちにん））性へとひるがえされた自己の誕生である¹²。そのときが恐らく、信心獲得の瞬間であり、社会的諸矛盾¹³いのちの尊厳を奪うすべてのものへの、徹底的抵抗の主体が成立する瞬間でもあり、個人として心から詫びを入れる瞬間でもあるはずである。

緒方において「信心獲得の瞬間」があつたのか否かはさておき、内面において価値の「大転換」が起こった緒方は、自然界との繋がりに目覚めていく中で、自分の愚かさや危うさに気づいて、自分の内なる世界にチツソ性が染みついていくことに気づかされたからこそ、チツソへの憎しみも消え、チツソを受け入れることができた。これ以降、彼は自然界の生命体に全幅の信を置くことに、より確信が深まっていったといえよう。緒方は今年、数え年七十歳の古希を迎えるはずだが、十数年前に当時の心境をつづった次の内面心象は、現在でも概ね持続されているのではなからうか。

私は今、水俣病患者として水俣病を語っているわけでもなくて、水俣病患者として生きているわけでもありません。私の願いは、人として生きたい。一人の「個」に帰りたいというこの一点です。水俣病事件の四〇年、戦後五〇年、私たちを支配し、まるで奴隷下に置くかのようなこの「システム社会」が肥大化してきて、自分の命の源がどこにあつて、どういうふう生きていくのか、もうわからんことになってしまったそのときに、生まれ育った不知火の海と、そこに連なる山々や天草の島々、その連なる命の世界の中に、自分がひとり連なつて生かされているという実感をともなつて感じたとき、本当に生きているという気がするわけです。

(緒方正人『季刊 魂うつれ』第四十二号)

(三)「本願の会」の活動

和解を持ち込もうとする体制側の画策によつて、水俣病が政治的に終息させられ、本質的な問題が溶解させられてしまう、との強い危機感を抱いた緒方は、水俣病事件の行く末を懸念する同志たち(石牟礼道子・杉本栄子ら)と、これまでの訴訟闘争とは全く異なる新たな精神運動を立ち上げることにした。それが「本願の会」である。この「本願の会」は、「人間の罪責」を明確にしたうえで、普遍的宗教性を帯びた生命界の救済運動という性格をもつていたことは、水俣病情報センターのパネルに書かれた「本願の会」の活動についての紹介文からも察せられよう。

『チツンは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

水俣病事件は近代産業文明の病みし姿の出現であり、無量の生命世界を侵略しました。その「深き人間の罪」をけつして忘却してはならないと訴え「魂魄こんぱくの深層に記憶し続ける」ことを誓って、平成六年（一九九四）三月「本願の会」は発足しました。その活動は、生命世界の痛みを我が受難として向き合い、対話と祈りの表現として、水俣湾の埋立地に会員の手彫りによる野仏（魂たましいし石）を建立し続けています。現代における「人間の罪責」、その行方は制度的埋立てによって封印されてはなりません。いまを生きる私たち人間が、罪なる存在として背負う以外に魂よみがえの蘇りはないと懸命の働きかけを行っています。

（水俣病情報センターのパネルに会員が書いた紹介文）

この「会」を立ち上げるに当たって、「本願の会」とネーミングしたのは緒方正人だが、それが多分に浄土真宗的な宗教性を帯びたものであったことは、彼自らも次のように認めている。

この「本願の会」というネーミングはいままでにはなかった、ちよつと宗教性をにおわせるような名称になっているわけです。この時に、じゃあ、どういう名前なまえの団体をつくろうかというので、みんなで考えようという事になって、「本願の会」というのはどうだろうかと提案したのは、私だつたと思います。名前を提案した立場上も、じつは「本願」とはなんだろうと、いまだに考えさせられています。思い当たるところでは、「命の願い」ということが「本願」という言葉にこめられているのではないかと思ってきました。いわゆる浄土真宗の本願寺の「本願」というのが、ヒントの一つになったことは確かですけれども、私自身は、そういう宗教

心は、それ以前にはほとんどなかったものですから、「命の願い」というのが「本願」という名に込められていて、おそらくこの十年来、もつとも活動的な団体ではなかったかと思えます。

『水俣・本願の会』座談会「魂うつれ」での緒方正の人発言、『環』vol.二五／二〇〇六、一六〇頁)

緒方によれば、「命の願い」ということを「本願」という言葉に込めたとのことであり、浄土真宗で最も根幹をなす教義としての基本的な用語である「本願」をヒントにしたと率直に認めているのだが、現に実在する本願寺を本山とする教団実態のありようには、以前からすごく不信感を抱いていたことは確かなようだ。緒方の言うところによれば、「私の家は代々西本願寺の系統ですが、取り立てて宗門に熱心なところはなく、末端の門徒にすぎません」(同上インタビュー)とのことだから、江戸時代以来の檀那寺(だんなでら)(門徒にとつての所属寺院)であつても、家族に不幸があつたときに葬式・法事をお願いする寺という程度の付き合いで、信仰上の関わりは希薄だったようである。そのうえ、この地域の真宗寺院に対してもあまり良い印象はなく、むしろ逆に強い不信感を彼に抱かせてしまったのは、寺側が所属門徒の諸事情に配慮して水俣病への無関心を装い、患者の心の拠り所としての救済活動には乗り出せず、ほとんど手を差し伸べてこなかったことであつたと思われる。「寺の方でも生きて病んでいる者には何ひとつしない四〇年間、水俣病について知らん顔で通してきたんだからすごい。それでも住民は逆らいはしない。以前は特にお寺を大事にしとつたそうです。しかし、じゃあそこに信を置いているかというのと、そうではない。子どもがいよいよや授業を聞いているようなもんでしょうか。」(語り・緒方正人・構成・辻信一『常世の舟を漕ぎて…水俣病私史…』世織書房、二〇七頁、『熟成版』SHERITパブリッシング、二四三頁)と呆れ顔に、真宗寺院の存

在感の薄さ、頼りなさを揶揄しているほどである。

緒方の真宗僧侶への当て擦りこすりは、さらに痛烈だ。次の引用文がそれである。

つき合いのある坊さんたちが驚いて私に尋ねました。「緒方さん、なぜ本願の会と名付けたのか」って。私はこんな風に答えました。「本当はあんたたちは、オレに怒らんといかんばい。なんでおれたちに黙って勝手に本願を名乗ったのかって。商標登録じゃないけれど、老舗の看板のあつとこ取られたら怒らんといかんばい。ニコニコしとって喜んでいるようじゃダメだって。なぜ本願の会と名付けたのかって？あんたたちがだらしなかつけん、つけたんだって。

（緒方へのインタビュー「文明の革命を待ち望む―「本願」とは何か―」『京都環境学』No三六・一四三頁）

ところで、浄土真宗の教義の本幹をなす「本願」に一つのヒントを得たとする緒方の思いにもう一度、話を戻すことにしよう。『命の願い』ということが『本願』という言葉にこめられているのではないかと思ってきました。いわゆる浄土真宗の本願寺の『本願』というのが、ヒントの一つになったことは確かですけれども、私自身は、そういう宗教心は、それ以前にはほとんどなかったものですから、……と述懐していることから、彼の価値観の「大転換」が起る以前には宗教心はもとより、真宗の教義や信仰とも無縁だった彼が「ひっくり返って」からは、「本願の会」との名称を提案するほどに、真宗の教義にある程度の関心と知識を持つようになったのではないかと推測

できると思う。ただし、本人はきっぱり否定し、かつ弁明しているように、「本願とか信仰の問題にどうしても係わってくるのは、信仰心みたいなものと重なってくるからでしょうね。ただし、そのことで教団化しないように、『本願の会』の始めから私は石牟礼さんや他の人たちに言ってきました。こういう考え方になろうとしてなかったのではない⁽⁹⁾。あるいは、本を読んでそうだったのでもない。何というのかな、何かを見てしまった。感じてしまった。」(緒方へのインタビュー「文明の革命を待ち望む―「本願」とは何か―」『京都環境学』No.三六・一四九―一五〇頁)からだという。確かに、彼の「大転換」は何らかの宗教的回心にも近いものを体験したことは間違いないさうだ。しかしその「回心」は、具体的な宗教者の宗教書から導かれたものではなく、彼自身が絶望の淵から「見ってしまった。感じてしまった」不知火海沿岸漁民が古来から伝統的に身に継承してきた宗教的エートスとしての普遍性との出会い、蘇りであったであろう。次章で若干考察したいと思うが、人間をはじめとするすべての生命体は「自然の法の支配」のもとに委ねられている存在物であることを実感し、彼自身もそうした存在に他ならないのだと、はつきりと自覚し、そこに「信」を置こうとしたのではなからうか。

「本願の会」が未来永劫にわたって、事業の成就をめざすとして掲げているものは、つぎの通りである。

- (一) 水俣湾埋立地に対し、水俣の気候、風土になじんだ草花や木々の着床を促し、可能な限り自然環境の創造を計り、その保全のために努力すること。
- (二) 水俣湾埋め立て地に終わることなく魂石(野仏)が置かれ続け、祈りが捧げられること。
- (三) 安置された魂石(野仏)に魂を入れ、祈りの行事を行なうこと。

(四) 人類が水俣で起きた様々な問題に対し、いかに無力であるかを謙虚に認識し、近代を総括し、新たな思想の地平を水俣から拓くこと。

このうち、(一) (二) (三) の課題については、歴史人類学者の下田健太郎が、二四ヶ月にわたるフィールドワークによって克明に観察・分析された成果を出版されている⁽¹¹⁾。「本願の会」における緒方の活動についても、緒方の仕事(漁)を手伝い、生活をともにしながら、彼の仕草や考え方をひとつも見逃さないという取材姿勢でもって臨んだ成果が本書に凝縮されている。

(四) の課題については、まさにこれからのわれわれ現代人の課題でもあるのだが、「大転換」後の緒方に見えてきた宗教的世界に、新たな地平を拓くひとつのヒントが示されているように思う。

(四) 「大転換」後の緒方正人に見えてきた宗教的世界―「自然界の法の支配」に信を置く思想―

水俣闘争にのめり込んで先鋭的になっていた若き日の緒方にとつて、石牟礼道子は近寄りがたい「雲の上」の人だった。しかし、その彼の内面で「大転換」が生起してからは、石牟礼の小説・評論等に共鳴できるようになり、次第に親近感も沸いて近づけるようになったと、緒方は回想している⁽¹²⁾。その石牟礼のメッセージのひとつに「われわれは、逆世に転生することが必要であり大切だ」という一節があるそうだが、意味的には、もう一度過去世に生まれ変わって世の中を作り変える必要がある、ということではないかと思われる。石牟礼の思いとしては、そこまでいかなければ水俣病事件はこれから先、一步も前には進めない⁽¹³⁾、との強い危機感から発信されたものである

う。

こうした石牟礼のメッセージを直感的に受け取ってか、緒方も過去世の人々の「いのち生命の記憶」に思いを馳せた宗教的世界の持つ意味の大切さを再認識したようである。

昔の人は、じいさんやばあさんがなくなった家ですぐに赤子が生まれてくると、魂が入れ替わったんだと言ったもんです。親よりじいさん、ばあさんに似るとるという言い方もよくした。「人は死んでも魂は……」という感覚は俺たちの中にごく普通にありました。盆には亡くなった人たちが、「帰ってきなつたぞ」ときかされ、大きい提灯をさげて戸を開けて仏さんを迎え入れた。村に死に人が出た時には、村人が総出で懸命に葬儀を担い、老若男女みんな涙とともに浄土へ見送ったもんです。そういうところに流れている感じ方や考え方は大事だと思っんです。

（語り・緒方正人・構成…辻信一『常世の舟を漕ぎて…水俣病私史…』世織書房、二一五頁）

しかし、こうも言っている。「ことさら道子（石牟礼）さんの本や発言を考えていたわけではないですけど、この時私は自然界の生き物の世界に強く引き戻された感覚があるんです。テレビを壊し、車を壊し、狂って狂った先に、自然の世界に引き戻されてそこで救われた。帰るべき世界を見つけたことができた」（緒方正人「三十八億年の生命の願い」『石牟礼道子―魂の言葉、いのちの海―』道の手帳、河出書房新社、三八頁）と。

こうした狂おしい個人的体験を潜り抜けた緒方は、自然界の中で再生を果たし、「自然界の法に支配」された自

『チッソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

然との「対話の社会」に軸足を置くことによって、矛盾だらけの「制度社会」（押し付けることばかりの一方通行の社会）を相対化し得る立ち位置を獲得したといえよう。

次の引用文も彼によって語られたものだが、「自然界の法に支配」された世界に身を置いてこそ見える心象風景なのではなかるうか。

縁というのは深いものなんです。人間がそれを読み解ききらんだだけの話で。人間なんてお釈迦様の手のひらの上で遊ばされているにすぎないんです。でも人間はすべて自分の意思でコントロールしていると思っていて、理解できないことはみんな偶然と見なしてしまう。まあ、お釈迦様の手には五本の指があるわけだから、人間にもそれだけ選択肢が与えられているということかもしれない。でも、自分がどれを選び、相手がどれを選ぶかということは、全くの偶然なんかではないです。かと言って、もちろん必然というのでもない。

俺はこげん思う。偶然と必然は反対ではなく、つながりをもった、いわば親戚みたいなものではないかと。偶然と必然の「然」、この「然」の中にすべてが入っているんじゃないだろうか。……昔はこういう「然」のつながり、あるいはお釈迦様の手のひらが、人々に見えていたと思う。……全体としては世界を包み込んでいるものを感じていた。

（語り…緒方正人・構成…辻信一『常世の舟を漕ぎて…水俣病私史…』世織書房、二一六〜二一八頁）

引用文の前段は、人間なんて「お釈迦様の手のひら」で遊ばれているようなもので、人間は自分の意志ですべて

をコントロールできると錯覚しているだけだというのがその趣旨であるが、後段は直感的で、体験した本人でしか感じ得ない非論理的な説明ではあるものの、緒方の独自の考え方が示されていて、注目される。「偶然」と「必然」は対立的概念ではなく、両者ともひとつの繋がりを持ったものとして捉えるべきだ、それを繋いでいるのが「然」であって、「然」はまた、「お釈迦様の手のひら」のようなものであるとする。とすれば、人間を含むすべての生命体は、ともに深い繋がりがあり、全体としてみれば、「お釈迦様の手のひら」の中に包み込まれている個々の存在であるということ、昔の人は体験的に知っており、それがはつきと見えていた、というのである。「制度的社会」＝「システム社会」の中にがんじがらめに呪縛されている現代人には、果たして「お釈迦様の手のひら」が見え、かつ包み込まれていると実感できているのだろうか。ちなみに、「響きょう存ぞん哲学てつがく」の提唱者として知られる哲学者の鈴木すずき亭てい（一九一九～）は、現代の精神的危機を克服する道は、「存在者そんざいしや逆接空ぎやくせつくう」の根本理法に目覚めることである、と現代に生きる我々に強くその自覚を促しているが、緒方の「お釈迦様の手のひら」の譬えでいえば、「あらゆる存在者は、どうしたばたしてもお釈迦様の手から外にすることは一瞬といえども全く不可能なのだ。したがって絶望とか反逆とかいっても、お釈迦様の手から下へ墜落することを意味するのではなく、その手のなかでわれ知らず逆立ちしているようなもの」（鈴木宗教哲学のよき理解者である哲学者・柴田秀の解説文）⁽¹⁴⁾と覚ることが、その「理法」の意味である。鈴木自らの言葉にしたがえば、「人間のみならずいかなる存在者もこの根本的理法から外に出ることは不可能であり、ただこの精神の根本的理法に覚ることにより、これに従って生きるか、これを知りながらあるいは知らずに、それに逆らって生きるかのいずれかの人生があるにすぎない」⁽¹⁵⁾ということである。

たとえ無意識のなかでの直感的感覚であるとしても、緒方にはこの「存在者逆接空」の根本理法に目覚めていた

のではなからうか。「制度国家」・「制度社会」⁽¹⁶⁾との二重構造下に存在していることを緒方自身も認めながらも、生き物と共にある世界Ⅱ「自然界の法の支配」する世界に「信」をおく緒方にとっては、この根本理法を直感的に身に体し、この「理法」に従って生きていくことに軸足を定めた人であり、この「理法」に鈍感であり続けるか、ないしはまったく気づくことができない人たちは、現代社会に蔓延している精神的危機に怯えながら生きていかざるを得ないであろう。「自然界の法の支配」のもとに身をゆだねて生きてゆくことのできない現代に生きる多くの私たちは、嘆かわしいことに後者の立場にとどまって、押し寄せる精神的危機に唯々怯えながら、虚しく生きていくほかはないのではなからうか。

むすびにかえて―水俣病事件の本質とは―

緒方は、水俣病事件の本質をどのように捉えていたのであるうか。

「海や魚を恨まなかったこと。魚を食べ続け、毒を背負って生まれてくる子どもと向かいあい、育て続けてきたこと。それから、殺されても殺さなかった。この三つは何を物語っているかと申しますと、〃殺生の罪深さを知っていた〃ということだと思います。そのことが私は水俣病事件の本質だと思います。チツソや行政に関わってきた人たちに欠けていたのは、あるいはなかったのは、まさしく殺生の罪深さを知ることであり、そうしたところから生まれる生命感覚、いのちの感覚がなかったんではないか、と思います。……〃生命の記憶〃

ということは、私たちの、人間のずつとはるかな、命のはるかな歴史から受け継がれてきた人間の魂と違って、も差し支えないと思います。人間の魂、別の言葉でいえば「いのち生命の記憶」というものが非常に危うい時代になつてしまった、そう思えてなりません。

（緒方正人「生命の記憶よ甦れ」『ともしび』二〇〇三年五月第六〇七号）

水俣病事件の本質は、水俣湾沿岸の漁民たちに宗教的エートスとして宿る「罪の自覚」の中に内包されている、と緒方はいう。この地域の漁民たちは、理不尽で悲惨な水俣病事件に巻き込まれながらも、①海や魚を恨まず、魚を食べ続けてきたこと、②毒を背負って生まれてくる子どもと愛おしく向き合い、育てつづけてきたこと、③水銀廃液の垂れ流しで殺されても決してやり返さなかったこと。これらのことが共通して物語ることとして緒方が指摘するのは、はぐく「いのちの感覚」を大切にするという豊かな宗教性が伝統的に育まれていたということである。緒方もそうした水俣の宗教性に目覚め、「個の責任」を背負いつつ、「生命の記憶」を蘇らせるための模索を、あらゆる表現形態でもって、これからも続けてゆくということであろう。

最後に、緒方正人の生きざまから、私が少々学んだことを告白しておきたいと思う。緒方は水俣病事件の本質を、己の「罪深さ」＝「原罪」にあると見据え、思いを同じくする仲間とともに、何よりもひとりの人間として「個の責任」を果たすべく「本願の会」を立ち上げ、いまなお、さまざまな表現方法で実践している。ひるがえって、私

を含めた本願寺教団に所属する真宗僧侶が、発生から六十有余年に及ぶ過程で水俣病事件に被害者の立場に寄り添って支えてきたという事例はあまり耳にしていない。「念仏申す」身の私に引き寄せていえば、水俣病事件は私身の信心の課題であると考えている。その点、緒方のわれわれに対する痛烈な批判には、それを甘んじて受け入れるばかりか、深刻に受け止めなければならない大きな課題と思っている。歴史的に見て、真宗教団が政治・社会問題に対して総じて体制順応的だったのは、教団教学における二元論的「真俗二諦」論⁽⁷⁾を便法にして世俗問題に関わってきた結果である。とりわけ、明治以降の近・現代の真宗教団が歩んできた教団史は、ある国家神道史研究者の弁によれば、「近代の戦争との関係に焦点を絞れば、『国家神道』とはまさしく『浄土真宗』のことである。『国家神道』を『国家真宗』と言い換えていささかも問題はない」⁽⁸⁾と指摘しているが、教団教学史を顧みれば、「国家神道」というウルトラ政治神道に絡めとられてしまったという点において、悔しくとも概ね認めざるを得まい。教団関係者が、二元論的「真俗二諦」論から脱却して、本来的な大乘仏教の道理⁽⁹⁾に立ち返ることは、正直至難なことといわざるを得ないが、水俣病事件における「本願の会」に集う患者、とりわけ緒方正人の水俣病と正面から向き合った壮絶な現場体験・身体体験から滲み出た生きざまに学ぶ中に、得難いヒントが隠されているように思えてならない。

(註)

- (1) 名和達宣「西田哲学と親鸞教学―『逆対応』の可能性」『西田哲学会年報』二二巻・一一〇～一一一頁
- (2) 「聖人(親鸞)のつねの仰せには、『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、

それほどの業をもちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひしことを、
：：（「歎異抄」後序、『浄土真宗聖典』（註釈版）八五三頁）

(3) 筆者が緒方正人氏の存在を知り、氏の生きざま・思想に関心を抱くようになったきっかけは、『チッソは私であった』という緒方氏の著書を読んでからである。筆者は熊本県水俣市にある「水俣病センター相思社」を訪れ、関連資料をコピーさせていただいたことはあるが、緒方氏とはいまだ一度も面会できていないことをお断りしておく。

(4) 水俣病事件は、近代産業文明の負の姿が露呈したもので、日本で発生した戦後最大の公害事件として広く知られている。そもそも水俣病が発生し、一大公害事件に拡大させてしまった最大の原因は、日本が敗戦後にすばやい復興をめざして高度経済成長を熱望し、経済価値を最優先させて利益を上げることが豊かな国を実現する近道だと国民が妄信して、国や企業の利益第一主義の経済政策の推進に全面協力して来た結果にほかならない。水俣病は、メチル水銀化合物（有機水銀）が生き物の体内に蓄積されて神経機能を麻痺・破壊されたことによって引き起こされたものである。その発生の過程と原因については、国策企業のチッソ水俣工場（熊本県水俣市）で生産された製品の製造過程で排出された有毒の有機水銀を含む排水を、何の安全処理もせずに、水俣湾に垂れ流したことによって湾内が汚染されことによる。その有機水銀が食物連鎖によって、魚介類・動植物が摂取したことはもとより、人体にまで甚大で取り返しのつかない被害を出だしてしまったのである。これはまさに人間の作為が引き起こしたブーメラン現象ともいえる人災にほかならず、人間が自然環境・自然秩序を破壊した報いとしての罪業の結果にほかならない。

水俣病は、当初は原因不明の奇病とされ、チッソからの排水が原因だと早くから特定されていたものの、加害企業の隠へい工作によって公表が遅れ、その間につきつきと死亡犠牲者が出たばかりでなく、数万人におよぶ水俣病患者や「胎児性水俣病」と呼ばれる患者も生み出された。患者本人はもとより、その家族にまで耐え難い業苦を強いることになり、その上、

『チッソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

他者の冷たい差別に晒されてきた。水俣病の根本的治療法はなく、今も多くの人達が手足の感覚障害・頭痛・めまいに苦しんでいる。それにもかかわらず、水俣病の認定や補償のハードルは高く、病状を訴える人の一〇割ほどしか、水俣病と認定されていない現状にある。その大きなターニング・ポイントとなったのは一九七八（昭和五十三）年十二月で、政府は水俣病対策を決定し、環境庁から水俣病の新たな認定基準の通知が出された。これを境に、水俣病と認められた人は激減していくことになった。その一方で、加害企業であるチツソには公的資金が投入され、国によって救済されることになった。

チツソを潰せば患者への補償も出来なくなるし、地域社会も崩壊してしまうというのが、加害企業への公的資金支援の論理であるが、それは少数の犠牲者には目をつぶってでも、多数者の生活の安定を求めることを優先させようとする意図の上立つ論理であり、本来「共生社会の実現」を望む多くの人々の願いとは、全くもって相容れない、悪しき資本主義の論理と言うほかはない。

水俣病が公式に確認されてから本年（二〇二三）で六十七年目となるが、いまだ被害全容は明らかになっていない（これまで三二九〇一人が患者認定の申請をしたものの、二〇二三（令和五）年四月三十日現在で認定されたのは二八四人、うち二〇三八人が死亡している）。患者団体は幅広い救済のための調査の実施を政府に求めているが、政府は今もって明確な実施プランすら提示していないのが実情である。

(5) 渡辺京二『日本近世の起源―戦国乱世から徳川バックス・トガワの平和へ』（弓立社、二〇〇四年・一一四―一一五頁）

(6) 真宗を含めた日本の既成仏教団が、水俣病事件に傍観者的姿勢に終始してきたことについては、石牟礼道子の次の証言「日本には、まあ仏教がございましたけれどもその宗教的な集団は、水俣病に関してはカンパをいただいたりとか、中には戦いの戦列の中にはいつてきてくださった方もいらっしやいましたけれども、本当に患者さんの魂に添うようにして宗教者が全面的に働いたことは、まあ残念ながらなかったと思うんです。」（『石牟礼道子全集』第三卷、五四六頁）に集約されている。

(7) 緒方正人のプロフィール作成にあたっては、「緒方正人年譜」(『常世の舟を漕ぎて…水俣病私史…』世識書房、一九九六)、
「緒方正人『水俣病事件』私史」(『常世の舟を漕ぎて 熟成版』SOLEIパブリッシング、二〇二〇年)、「略年譜 緒方正人と
水俣病事件」(『チッソは私であった』河出文庫、二〇二〇年)の記事を基本としたが、緒方の講演録やインタビュー記事か
ら取り出したものもある。

(8) この小野文生の論文の初出は、山名淳・矢野智司編『災害と厄災記憶を伝える』(勁草書房、二〇一七年・三一〜六九頁)
であるが、単著『非在』のエッセイカーただ生きることの歓待の哲学―』(東京大学出版会、二〇二二年・一七一〜二〇八頁)
に収録されている。

(9) 西田真因「社会変革の課題を荷なう主体の誕生としての南無阿弥陀仏」(『西田真因著作集』第二巻、三七八〜三七九頁)

(10) 緒方をはじめ、「本願の会」のメンバーが「組織化された宗教」に強い警戒感を示していたのは、本会が「個の集まり」を
最も重視して結成された「会」であることにもよるが、当時の日本社会を震撼させていた「オウム真理教」の教祖が熊本県
八代出身であったことも念頭にあったであろう。

(11) 下田健太郎『水俣の記憶を紡ぐ―響き合うモノと語りの歴史人類学―』(慶応義塾大学出版会、二〇一七年)

(12) 緒方正人「三十八億年の生命の願い」(『石牟礼道子―魂の言葉、いのちの海―』所収、河出書房新社、三八頁)

(13) 柴田秀「イエスと釈迦ないし仏教思想」(『イエスの革命と現代の危機』所収、南窓社、二〇一八年・五七五頁)

(14) 柴田秀「現代における危機克服の道(その二)」(『現代の危機を超えて』所収、南窓社、一九九一年・一八八頁)

(15) 鈴木亨『生きる根拠を求めて』(三一書房、一九七五年・四八頁)

(16) 作家・田口ランディとの対談の中に、同趣旨の発言を見ることができる。

(緒方)「いろいろなことが制度や仕組みのなかだけで片付けられていく。それを簡単に救済とか解決と呼んでしまう。ま

『チッソは私であった』の著者・緒方正人の思想行動の「大転換」

あ、結局、世の中に希望がもてなくなって、絶望感のなかで狂いに狂ったのが一九八五年の秋。必死に世界を探そうとしたわけです。自分の本当の世界が必ずあるはずだと思つてね、四苦八苦、七転八倒しながら狂つて、そのときに初めてわかったんだ。俺は、不知火海の海辺の女島めしまという小さな漁村に生まれ育つて生きてきた、生かされてきたということがね。これこそが、実は俺の命の物語そのものだったと気づくんです。その〈物語に従う〉というか、そこにとどまつて、システム社会のほうに行かないで、俺は水俣に選つてきたんだと思うんです。俺自身がこの不知火海やこの山々のひとつだ、ということに気づかされたんですね。(田口)「気づかされた?」。(緒方)「そうです」。(田口)「だれに?」。(緒方)「だれというか……。自分を越えたものです。けつきよく、自分でどんなにあがいても、お釈迦さまの手のひらにいる孫悟空みたいなもので、なにか大きなものに動かされてるつて感じなんですよ」。(田口)『水俣 天地への祈り』河出書房新社、二〇二一年、九四〜九五頁)

(17) 二元論的な「真俗二諦」論とは、教団教学としての真宗教学において、仏法(真宗信心)と世法(世間の法律・道德)の関係をどうとらえるのかという問題について、覚如・存覚・蓮如教学以来、とりわけ江戸期以後の教学的仕組みとして、「真俗二諦」論という考え方があつた。仏法を真諦しんたい、世法を俗諦ぞくたいととらえて、真諦である仏法と俗諦である世法とは相資相依、つまり「相資け相依る」という相互協力・相互依存の関係にあると説かれたのが、「真俗二諦」論の考え方である。この便法の応用編として、仏法は内心にたくわえて社会生活では世間の法律に従うべきだとか、生きている間は世法に従い、死んだあとは仏法で浄土往生間違いなしというふうな言い方もされてきた。このような理解に立つ「真俗二諦」論では、仏法と世法は、それぞれ依存・協力関係にあるものとなる。この論理が何を意味するかと言うと、仏法の名において世俗の権力を正当化することになり、その見返りとしては、仏教教団が権力の保護を受けることになる。これこそ江戸期以来の真宗教団が多用してきた「真俗二諦」論の実態なのである。こういう考え方は、本来の大乗仏教の道理でも、親鸞の真宗の信

心でもない。

- (18) 新田均『「現人神」「国家神道」という幻想』（PHP研究所、二〇〇三年、二四八頁・改訂・増補版、神社新報社、二〇一三年、二四八頁）

(19) 大乘仏教で説く「真俗二諦」の道理とは、菩薩による衆生済度という大乘菩薩道の利他行の実践、菩薩による世俗世界での「世俗諦の顕現」というダイナミックな活動態そのものといえよう。そしてそれが信心の行者にはたらくときは、弥陀の誓願を廻向せられて、光明に出遇うという宗教体験をへて、念仏の実践者として、たゆまず利他の活動に立ち向かうべく主体者となるということであろう。